

地域アンシエーションの芽(71)

京都大学名誉教授 本山美彦

種子をめぐる勢力(17)

オランダ通詞、今村英生

一級の通詞(こうじ)として、志筑忠雄(しじゆき)と、ただお、1760~1806年)と並び称されてきたのが、今村英生(いまむら・えいせい、1671~1736年)である。西世界に、日本の歴史や風俗を紹介したドイツ人のオランダ商館付き医師、エンゲルベルト・ケンペル(Engelbert Kaempfer、1651~1715年)の『日本誌』(History of Japan)は、1727年ロンドンで出版されて大評判となった。以後、数多くの西人がこの著に啓発されて日本研究に携わるようになった。

日本の項目は、ほぼすべて『日本誌』を参照したものであった。

シャル・モンテスキュー

(Charles-Louis de Montesquieu、1689~1756年)の『法の精神』(De l'esprit des lois、1748年刊)にも引用されていたり、『日本誌』は、18世紀ヨーロッパの日本研究に欠かせない資料となっていた。

短い滞在しか許されなかった

オランダ商館付き医師は2年しか日本に滞在できなかった。しかも、出島に閉じ込められていたのである。商館長の滞在期間はわずか1年であった。それでも、將軍に謁見するために、商館長と医師は江戸旅行を許された。この旅行が大きな成果を医師たちにもたらされたのである。

日本に多くの門人を擁したドイツ人のフィリップ・シーボルト(Philipp Siebold、1796~1866年)の滞在期間は1823~1828年の5年という例外的に長い滞在を許された(https://www.phnagasaki-u.ac.jp/history/research/cpl/chapter1-2.html)。シーボルトを慕う蘭学者のお陰である。

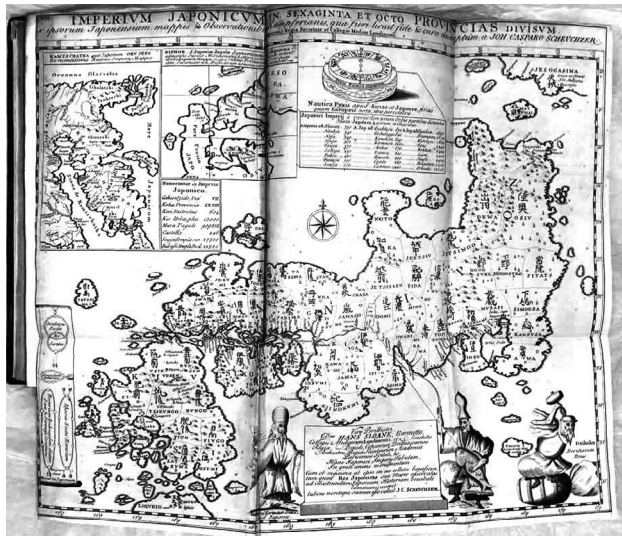
エンゲルベルト・ケンペルの貢献は、アジア各地の滞在先での見聞をまとめた『廻国奇観』(Amoenitatum exoticarum Politico-physicomedicarum、1712年刊)を著述したことである。その第5巻のほとんどは、日本の植物のみに費やされていて、32種類の植物について記述されている。植物学の大



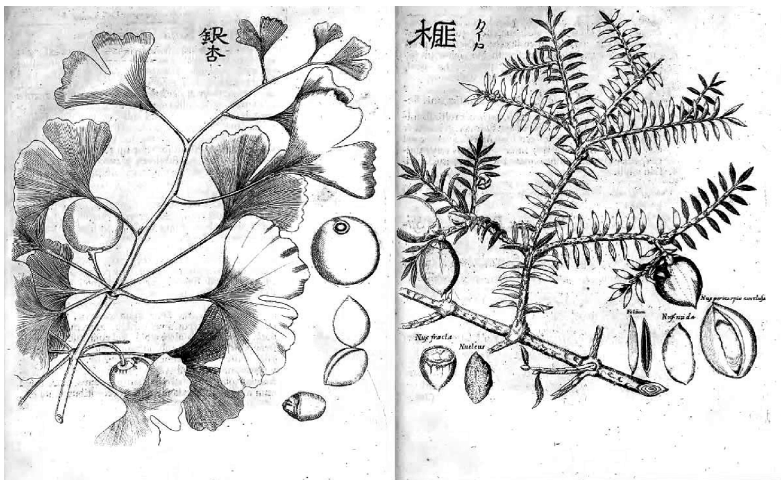
今村源右衛門英生

家であるカール・リンネ(Carl von Linné、1707~1778年)は、これを基にした『植物の種』(Species Plantarum、1753年刊)に日本の植物を世界に紹介している(https://ja.wikipedia.org/wiki/カール・フォン・リンネ)。カール・ベンペルもまた日本の紹介を行なっている。

『日本紀行』(Voyages de C.P. Thunberg au Japon、1766年刊)、『シベリク日本紀行』(山田珠樹訳註、改訂複製版、雄松堂書店(異国叢書、1966年)、C.P.ツェンペリー「江戸参府随行記」(高橋文訳、平凡社東洋文庫、1994年(原典訳本)が)にまたに読み継がれている。



『日本誌』に折り込まれている日本地図



ケンペルの『廻国奇観』。左は銀杏、右は榲桲(カヤ)について記されている。

な資料を蒐集して彼らは本国に持ち帰り、一級の日本歴史研究者になった。つぎの商館医師、スエーデン人、カール・ツェンペルトン(Carl Thunberg、1743~1828年)は、1775から1年しか滞在しなかった。

結論を急ごう。滞在わ

社会資本政策研究会

〒533-0032 大阪市東淀川区淡路三丁目一六番一三
電話(〇六)四八六二一四〇二
FAX(〇六)四八六二一四〇二三

サンセイ生コンクリート株式会社

代表取締役 稲村 義昭

〒651-1412 兵庫県西宮市山崎町山口六五
電話(〇七八)九〇四一三六九
FAX(〇七八)九〇四一三〇七

関連団体を支援する会 KU

関西生コン関連経営者会

吉野建設株式会社

言芸 提文

~投稿歓迎~

・ 桐喝を 抑止と呼んで 核を持つ(憲法窮状)
・ 資本主義 夢を売り買い やがて無に (下町ソケット)

「桐喝」と「抑止」は全く異なる意味ですが、「脅し」が「防衛」にすり替えられ、「平和のため」と称して核を持っているのが現状です。資本主義は成長と拡大を前提とします。成功や富を追い求めても、それが本当に意味のあるものかを考えさせられます。